

## 農村環境と生態系利用の二極化

誌名	農村計画学会誌 = Journal of Rural Planning Association
ISSN	09129731
著者名	山本,勝利
発行元	農村計画学会
巻/号	34巻3号
掲載ページ	p. 334
発行年月	2015年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 農村環境と生態系利用の二極化

Polarization of Rural Landscape and Ecosystem Services

山本 勝利\*

Shori YAMAMOTO

25年近く前に、「農村とは何か」ということを盛んに議論したことがある。学会であったか、職場であったか、調査先であったかは覚えていない。論点は「農業を行う場」が農村なのか、「農家が住んでいる場」が農村なのかということであった。そんな話を、小田切徳美氏の『農山村は消滅しない』（岩波新書）を読んで思い出した。既読の方も多いと思うが、本書の最後で小田切氏は、伊藤洋志氏の「ナリワイ」を紹介し、多様な「ナリワイ」からなる農山村移住者の生き方の可能性を論じている。

「ナリワイ」、いや、多様な「生業」を組み合わせることは、元々、ごく普通のことであったと思う。特に農村では、地域の自然的、社会的特性に応じて、その土地で得られる資源を有効に活用するための様々な生業が組み合わされていた。山村では、林業を主としながらも、農業やその他の生業を組み合わせていたし、20世紀前半には養蚕が主業であった地域も多い。東日本大震災で津波被害を受けた三陸の水田も、コメの生産基地ではなく、漁村の生業の一部としての水田であったに違いない。里山における薪炭や、飼料、肥料、建材その他の多様な生物資源の利用も、この「生業」の一部であった。

ところが、戦後の食料増産、旧農業基本法の「自立経営」施策の下で、例えばコメやスギの生産等、特定の、個別の目的に応じた最適化が図られた。その中で、資源利用のための多様な生業の組み合わせが失われた。基盤整備が行われた農地は利用されるが、未整備の農地は放棄されることは条件不利地問題として古くから指摘されてきた。それと同時期に、里山では、新たに植林されたスギやカラマツ等の林木も含めて、資源利用は完全に停止された。つまり、農村の資源利用は、個別の目的の効率性に照らして「使われる場所」と「使われなくなる場所」の二極化が進行した。その結果、「使われる場所」では高度に、時には過剰に人間による環境への関与が強められ、「使われない場所」は放置され、農村の環境自体が二極化している。生物多様性国家戦略で言う「第1の危機（人間活動の拡大による危機）」と「第2の危機（人間活動の縮小による危機）」の同時進行である。ただし、「第1の危機」は都市近郊で、「第2の危機」は中山間地

\* 国立研究開発法人農業環境技術研究所

でのみ生じているのでは無い。里山はもちろん、農地の耕作放棄も、今日、都市近郊で急速に進行しつつある。

冒頭の「農村とは何か」に戻って考えると、それは「人がそこに住んで、農業を営んでいる場所」ではないかと筆者は考える。ただし、ここで言う「農業」は、食料生産業としての農業だけではない。林業も、漁業も、里山利用も、あらゆる「生物生産」の行為を農業と捉えたい。生物生産は、当然、その土地の自然環境、生態系の影響を強く受ける。生態系は、人がいてもいなくても、自ずから様々な機能を有しているが、そのままでは人間は利用出来ない。生態系の機能を人間に都合良く引き出すことによって生物生産が成り立つ。その意味で、「生物生産」としての「農業」は、人が、そこに住んで、その土地の生態系機能を利用する、言い換えれば生態系サービスを楽しむための「装置」なのであろうと思う。農村では、そこで暮らすために必要なあらゆるモノを生態系サービスによって獲得するため、様々な装置が組み込まれている。それが農村環境の多様性を維持してきた。

ただし、この装置は、常に同じだったわけではない。里山利用の歴史を見ると、新田開発や交通（馬）の発達に伴う草山の拡大、都市の拡大や資本主義の発達に応じた植林地や桑園の発達が見られた。それでもこれは、生態系サービスを楽しむための装置である農業を時代に合わせて選び出し、強化したに過ぎない。他の装置を捨てたわけではなく、多様な装置の活用、すなわち多様な「生業」の組み合わせは維持されていた。

逆に言えば、農村環境の二極化とは、様々な装置の中から、特定の目的に合致した装置を選び出し、それに特化させて、他の装置を捨ててしまった結果である。捨てた分は、貿易という別の装置により、海外の生態系サービスへの依存を高めている。また、生物生産は、工業や商業施設のような新陳代謝を容易に行うことは出来ない。このため、時代の要請に合致しない古びた装置は放置される。特定の装置に特化した農業で、その装置が放置された結果が、今日の農村環境であらう。

農山村の高齢化、人口減少、都市での農業離れ、農作物流通のグローバル化と、それに対抗するための農業生産性の強化により、農村環境の二極化はますます進行する恐れがある。農村の環境、ひいては農村の地域社会を次世代に継承していくには、単一の解決策を求めるのではなく、様々な生態系サービスを利用する多様な生業の組み合わせ、すなわち「ナリワイ」を農村に再構築していくことが重要なのではないかと考える。